

経 済 研 究

第12巻 第3号

July 1961

Vol. 12 No. 3

アダム・ファーガソンと古典的政治経済学

大 野 精 三 郎

I 問題 この論稿は、W. Sombart¹⁾=R. Pascal²⁾=Meek³⁾の問題提起から示唆をうけ、『スコットランド歴史学派 (The Scottish Historical School)』の典型的代表者とみられている Adam Ferguson の『市民社会史論⁴⁾』の歴史社会学的研究を、これらの論者とはことなり、その方法——Ferguson がこの学派と共有し、発展させたのであるが、——と関連させて、統一的に把握し、この視点から Ferguson の古典的政治経済学の成立に果たした役割と意義とを解明し、あわせてこの学派のなかでの Ferguson の地位を改めて明らかに

することをその目的としている。というのは、これらの論者の問題提起は、これまで経済学史上からも、歴史家からもその重要性が認識されなかった『スコットランド歴史学派』を統一的にみる必要を強調し、同学派に共通する重要ないくつかの見解を明らかにし、この学派と古典的政治経済学の成立との相互関連をはじめ問題として示した点では劃期的ではあったけれども、同時に重大な欠陥を免ぬかれることができなかつたからである。すなわち、かれらは、第1にこの学派の歴史社会学的研究の内容を、その方法からきりはなし、しばしば方法を無視したり、単純化したりしておもにその内容からその学派に共通する重要な結論を導いていること、第2に、この学派の同一性を強調するあまり、Ferguson の特徴とこの学派のなかでのかれの占める地位とを明らかにすることに必らずしも成功したとみることはできないからである。

最初の問題提起者 Sombart は、まだ『スコットランド歴史学派』という名称を意識的に使用してはいないが、Ferguson をふくむ18世紀イギリスの歴史社会学的研究の特徴が人間の社会生活を

1) Werner Sombart, "Die Anfänge der Soziologie", in *Hauptprobleme der Soziologie*, Erinnerungsgabe für Max Weber, Band 1, 1923.

2) Roy Pascal, "Property and Society: the Scottish Historical School of the Eighteenth Century," *Modern Quarterly*, vol. I, No. 2, March 1938.

3) Ronald L. Meek, *Political Economy and Currents of History*, 1959. 水田・永井訳『古典政治経済学と資本主義』1959年。

4) *An Essay on the History of Civil Society*, 1767. 大道安次郎訳『市民社会史』1948年。原著の引用は1789年版による。

経験的・因果的に説明する点にありとし、それにもとづく歴史の社会学研究は、19世紀の Marx=Engels の唯物史観をその形骸化と断定しうるほどの実質的な成果を包蔵していると評価した。そのなかで Ferguson は『未だ十全な評価をうけていないけれども』、『思想の一貫性、問題提起の広さと資料の豊富さの点で、この時期の最もすぐれたイギリス社会学者のひとり』(S. 10) と数えられ、とりわけ国家の起源について、Engels の基本的命題よりはるかに首尾一貫して説明していると評価された。R. Pascal は、この Sombart の見解を継承するとともに、他方では、この見解がこの時期のスコットランドの1群の研究者—— A. Smith, D. Hume, W. Robertson, Lord Kames および Ferguson に共通しているところから、かれらを『スコットランド歴史学派』とよび、その理論的核心が歴史の唯物論的解釈にあることを明らかにした。D. L. Meek は、この Pascal の見解を全面的に踏襲するとともに、さらに積極的に、このような歴史の唯物論的理解が同時代に成立した古典的政治経済学を生みだす母胎となったばかりでなく、政治経済学の方法と形態とを決定するという、歴史社会学と古典的政治経済学の成立との相互関連の問題をはじめて提起したのである。この積極的な問題提起を別にすれば、Meek のばあいにも、Pascal と同じように、Ferguson はこの学派のなかで、財産関係と統治形態との因果関係を強調した点で W. Robertson と見解を同じくし、なおかつ歴史過程のなかで社会的闘争の重要性を強調したところに、その特異性が与えられているにすぎない。このように Ferguson の著作をその全体的関連からきりはなして個々の叙述に、この学派に共通な、あるいは Ferguson に固有な諸契機をみいだすことは、これらの論者にかぎられたことではない。マルクス経済史家 H. Cunow⁵⁾ もまた、Ferguson を一方では『18世紀イギリスの社会理論が到達した最も高い発展段階を最もよく示して

いる』と評価しているにもかかわらず、他方では Ferguson の理論が全体として統一的把握に耐えないことを認めている点で、これらの論者と軌を一つにしている。すなわち、かれは Ferguson の理論を『かれの鋭い眼光は確しかに、かれをして社会および国家の本質に深く透徹した多くの観察結果をもたらすに到らしめたが、しかしかれはそれをひとつの・それ自身でまとまった理論につなぎ合わせるには至らなかった』(S. 116. 邦訳 211 ページ) と規定しているのである。

このような問題状況をまえにして、Ferguson の理論をその方法と関連させて、統一的に把握し、その全体的把握のなかで、これら論者の指摘する個々の特徴を位置づけ、主題に接近することが Ferguson の『十全な評価』に到達するために、なによりもまず必要不可欠のことであるように思われる。

II 『市民社会史論』の方法と目的 主題へのこのような接近の仕方から生ずる困難は、問題提起から安易に推測されるのとはちがって、『市民社会史論』が直接に人間社会の経済生活を取りあつたものではないということである。それは、『野蛮(savagery)』から『蒙昧(barbarism)』を経て『市民社会(civil society)』に至る人間の社会生活の進歩の歴史である。そこでは政治制度のほかに、財産・法・技術・慣習・文学・科学などのあらゆる領域での人間生活の進歩をあとづけており、今日いわれる社会史または文化史をその主要内容としている。すなわち『市民社会史論』は、社会をその発展の全体性において捉えようとするこの学派の最初の試みであることを示している。そして Ferguson はこの社会発展を人間性の経験論的把握にもとづいて体系的に明らかにしようとする点で、この学派と共通の特徴をもつものであった。その意味で『市民社会史論』の第1篇『人間性の普遍的特質について』はかれの方法を明らかにしているわけである。ところで、Ferguson は人間の本性をいわば、個人の性質・能力に内在してその普遍的性質をひきだそうとするのではなく、むしろ歴史の過程であらわれる多彩な人間活動の基底にあらゆる人間に共通な原理をみいだすことを

5) Heinrich Cunow, *Die Marxsche Geschichtsgesellschafts and Staatstheorie. Grundzüge der Marxschen Soziologie.* Band 1. 1920. 石川・別府訳『マルクスの歴史社会ならびに国家理論』(改造文庫)1934年。

目的としている。

かれは、人間性を明らかにするためには、人間がその歴史の初まりから、また最新の記録が示すように、社会のなかで生活しているという事実に注目する。『人類は隊や仲間をなして相寄っているということ、個々人は愛情によってつねにある党派に結びつくとともに他の党派に対立する可能性もあること、こうした事実は、人間に関するわれわれの推論の基礎として認めなければならない』(p. 4. 邦訳7ページ)。だから人間性の把握のためには、人間を社会生活のなかで観察しなければならない。『社会は個人と同様に古い』からである。そして Ferguson は人間の社会性を、外面的な個々の経験的事実に基礎をおかず、人間の内的経験のうちに、すなわち社会のなかで人間が他の人間との交渉からうける感情に、『人間が社会についてだく感情・思想』のなかに求めている。この点からかれがイギリス経験論に共通する地盤にたっていることは明らかである。この2つのことから、かれは、人間が『個人として幼年期より、成年期に進むのみならず、人類全体としても野蛮より文明に進む』3つの根本的能力をもつことを明らかにしている。第1に、人間だけが全種族として進歩する可能性をもっていることである。人間をして他の動物から区別するものは幼年期から成年すなわち成熟期に進むことではない。動物はただこの個体的成長を知るだけだが、人間は『個体が進歩すると同時に人類全体としても進歩する』。第2に、人間は『進歩改善にたいして敏感であり、みずからのうちに進歩の原理、完成への欲望をもっていること』(p. 13. 邦訳18ページ)である。人間が示すあらゆる能力と素質は、人間性の一般的特質に属している。人間はつねに目的物を改良しようとする性質をもっており、たえず自分自身と自己の能力を改良しようとする性質をもっている。この能力の完成は、その最初のあらわれと同じく、人間性の普遍的特質にもとづくかぎり『自然的』である。第3に、人間は社会的性質をもつということである。『人間はつねに群れ、あるいは仲間をなして彷徨または定着し、和合または闘争してきた』(p. 24. 邦訳31ページ)。この3つの

根本的事実から、Ferguson によれば、人間生活についての3つの原理が導きだされる。第一の経験的事実としてかれは自己保存の原理をあげている。それは自己および種族の維持に役だつ原理である。第二の原理は社会において結合するという原理である。人間の社会性は、人間に固有な能力として、人間にとって幼年期が比較的長く両親の愛情を必要とすること、人間の仲間への愛着、すなわち『愛情、社会への愛、また安全への願望』からなりたつのである。以上2つの原理はこの学派の人々と共有するものであるが、Ferguson はさらに、人間生活についての第3の原理として不和と戦争の原理をあげている。個人や社会の対立・競争は利害の対立より生ずるだけではなく、憎悪や説明しがたい嫌悪からも生ずる。これらの感情から生ずる闘争は人間社会にとって破壊的ではなく、人間性の最も好ましい性質を示すことになる。この不和と戦争の原理を、人間生活における進歩の要因として肯定的に評価することによって、Ferguson はこの学派のなかで特異な地位をしめることになる。

このようにして Ferguson は最も一般的な事実から、個々の人間の性質、能力への説明に移るのであるが、すでに人間性の原理を社会のなかで観察してているので、この問題は、この学派の D. Hume, T. Reid などに比べて Ferguson では副次的な意味をもつにすぎない。いわば人間性の原理を個々の人間のなかにみいだすにすぎない。かれによれば、人間の特質は、『認識し活動する意思をもった主体』であるところにある。いいかえれば、人間の特性は『設備をととのえ自己の福祉をつくりあげ、自己の才能を改良する運命を担った存在』であるところにある。このような才能は動物的生活の必要をみたすことから生ずるのであるが、この活動は知性の能力と結びついている。知力は自己および種族保存のためと用いられるが、『利益関心』は人間行動の全動機をなすものではない。むしろそれと並んで社会性に基礎をおく道徳的感情もつ人間の特性があらわれる。『人間が本能によって結ばれた親切や友情といった性情によって社会のなかで行動することも』事実だからである。

従って、人間の幸福は、肉体的欲望の充足よりむしろ自己を『わが愛する社会の一部にすぎないと考え、その社会の一般的幸福こそわれわれの最高目的として追求すべきであり、われわれの行為の大なる基準なのである』(p. 79. 邦訳 99 ページ)。この幸福を求める能力を個々人がもつところに、人間の第 3 の特質がある。ここに人間生活における不和・対立の原理は最終的に解決の根拠があたえられていることに注目しておこう。このことはのちの重要な 1 論点となる。

『市民社会史論』はこのような人間性の把握にもとづいて『人間の行為はすべて等しく人間性の結果であること』を示すばかりでなく、『人間自身の行動を判断し、そして人間の最良の自然状態に到達する規準』を提供することを目的としている。すなわちそれは『正しいことはなにか、また不正とはなにか、人間の生活態度からみて幸福とはなにか、悲惨とはなにか、さまざまな状況のなかで人間の生活態度からみて幸福とはなにか、悲惨とはなにか、さまざまな状況のなかで人間の優しい性質にとって好ましいものはなんだろうか。その逆とはなんだろうか』(p. 15. 邦訳 21 ページ)という問題に答えることをその課題としているのである。このため、個人と社会との関係はなにか、社会的諸紐帯の性質はなにか、政治、商業、文学、学問などの機能およびそれが全体としての社会とどのような関係にたつか、現在の社会秩序はいかにしてそれ以前の秩序から生まれたのか、この発展の過程のなかで、社会のさまざまな段階をいかに理解するかが問題になるのである。そしてその発展に規則性があるとすれば、どのような要因によって規定されるかが分析の対象となってくるのである。ここで私は『市民社会史論』の全領域をとりあつかうつもりはない。このような人間性の原理にもとづいて、Ferguson が社会・国家の本質認識になにを寄与したか、古典的政治経済学の成立に果たした役割と意義とをこの方法と関連させて明らかにすることに集中しなければならない。

III Ferguson の『歴史』の特徴と国家の成立

Ferguson の歴史叙述の特徴は、第 1 に、その人間性の原理、とくに社会性の原理にもとづいて、

人類の歴史の端緒を思弁によってつくりあげた自然状態の仮設およびそこから国家の成立を導いてくる社会契約説を批判したこと。第 2 にかれ独自で社会発展の諸法則を発見し、国家が社会の一定の発展段階であらわれ、それが社会の機能を分担するかぎり、社会の外皮にすぎないこと、市民社会における国家の主要な機能を規定したこと、そしてこれらの社会の発展を貫徹して人類の進歩をあとづけたことである。

かれは、『われわれ自身の観察しうる範囲内や歴史の記録のうち常に現われた』人間の社会性の事実にもとづいて、T. Hobbes, J. Rousseau の自然状態の仮設とそれにもとづく国家の成立の根拠を批判した。かれらによれば人間は社会・国家生活に入る以前にはいわゆる自然状態にあったのであって、そこでは『それに続く時代に人間が示した状態とはなんら類似性をおびていない』人間が考えられていた。Ferguson によれば、『人間は如何なる条件の人においても人間であり』、『社会は個人と同様に古く、言語の使用は手足の使用と同じように普遍的なのである』(p. 9. 邦訳 12 ページ)。したがって人間の歴史に社会のない自然状態は考えられない。この社会の起源は『なにか曖昧な、はるかな起源からでているのである。それらは哲学のはじまるはるか以前から、人間の思索からではなくて、本能から発している。人間が群れをなすとき、その制度や政策はかれらのおかれてい環境にしたがって左右されるのである』(p. 186—7. 邦訳 238 ページ)。そしてこのように自然状態論者を批判した Ferguson は、国家の成立を、人間がこのような状態を抜だすために社会契約を結ぶことによって説明することを、あわせて退けた。かれによれば、『いかなる政治組織も単なる提携によって形成されるのではない。またいかなる統活も単に計画によっておこなわれるものではない』(p. 187. 邦訳 239 ページ)。意識的な政治社会の秩序と権威は、個人の才能・気力の相違と多数人の服従性が合致することによって徐々に形成されたものであって、けっして社会契約によって自然状態から一挙に形成されたものではない。

かくて人間の社会性を根拠にした Ferguson の

社会の歴史的発展過程は、社会契約論者の主張するように、理性や個人の計画の実現過程としてではなく、人間の本能的な動きに左右されて、何人も統制できない盲目的な発展過程としてあらわれる。『人類が現実過程にしたがって不便を除去し、明白な身近かな利益を追求するばあいには、想像も及ばない結果に到達するのであって、人類は他の動物と同様、その終極点を意識せずに自然の道を歩み続けるのである(p. 187. 邦訳 237 ページ)。この認識は、この学派において劃期的なことである。経済の分野でのこの各人の活動が相交錯するなかでの法則性の提求がのちの古典的政治経済学の重要な課題となったのである。ここではじめて社会諸形態の発展法則が問題となるのである。

人類の社会の最初の段階は野蛮社会である。この社会では住民は狩猟や漁撈、あるいは土壌の自然的生産物によって生活している。ここでは成員の数は少く、同質的である。私有財産は通常わずかの武器、器具、毛皮にすぎない。かれらの獲得する食料は、1団となって漁撈し、あるいは多数者の獲物であるところから、それは社会の所属となる。このような野蛮民族が、アメリカの土着民にみられるように狩猟と一緒に或る種の未開農業に従事するばあいには、かれらは土地と地上の収穫物の処分については、かれらの狩猟の獲物と同じ方法でおこなっている。男たちが共同で猟をするように、女たちは一緒に農耕する。これにたいし小屋は器具は家族財産とみなされ、主として婦人によって管理される。このような社会にあっては結合は強固である。『かれらは階級ないし地位の差別を認めていない』(p. 128. 邦訳 162 ページ)。私有財産は存在しなかったため、それを保護する政治組織も存在しなかった。ただ種族の防衛や種族内の秩序の維持のために長老が助言者や仲裁者になり、青年が戦士になったりするような、年令および性質の配分にもなう機能にもとづく一種の政治制度があるにすぎなかった。

このような野蛮社会が、社会のつぎの段階に進むのは、Fergusonによれば、『個人的利益への関心、所有観念の発達』によるのである。

ところが野蛮社会が内と外とにおいて、その量

と数とが増大することによって集団間の争いが激しくなった。戦場の勇士は衆人の尊敬を受け、特権を享受し、また技術の発達とともに個人はますます利己追求的となり不平等な財産の形成に導かれる。これにともなって恒久的かつ明確な支配・従属関係が成立するに至る。これが蒙昧社会である。この段階では『土地や気候の事情が、住民が主として農業に力を注ぐか、あるいは牧畜に力を注ぐかを、またかれが一定のところに定住するか、あるいは全部の所有物をもって絶えずあちらこちらへ移動するかを決定するのである』。この段階における富は『自然の単純な生産物より蒐集された貯蔵物や家畜の群れである』(p. 148. 邦訳 189 ページ)。またこの段階では、集団間の闘争がきわめて頻繁かつ激しく、あらゆる民族は群れをなした盗賊であって、戦争で指揮をとる勇敢な人々は、また戦利品の最大のわけまえをとるのである。かくて首長は、この『財産上の優越』と結びついて、ますます勢力を得る。従者たちは首長の身を守り、かれの地位を支持することに新しい公共的愛情の対象のみいだすのである。ここに一種の原始的君主制が成立する。このように民族のなかに指導者や王をおしだす事情や風習の変化は、また同時に『貴族や従属の程度において地位の昇進を要求する種々の階級を生ぜしめるに至る』。これに僧侶の階級が加わる。『迷信もまたある階級の人々を、すなわち僧侶という職名のもとに特殊な利益の追求に従う人々や、1団としての結合や強固さによって、また絶えざる野心によって、権力僭望者とみなしうる人々を生ぜしめるのである』(p. 194. 邦訳 247 ページ)。この段階の社会は、首長、貴族、王の従者、僧侶および人民から構成される。

しかしこの段階における集団闘争が頻繁にあらわれた結果、弱少な集団は征服され、大きな集団間にある程度の平和が保たれるようになってきた。平和の状態が続くと、これまで集団闘争や個人の英雄的行為に専念していた力の欲望がこんどは個人的利益へ向うようになってきた。かくて従来の集団間の闘争はいまや集団内部の闘争に転化してきた。かくて文明社会の段階に入るのである。

文明社会における最も特徴的なことは、個人的

利益の目覚めと分業の発達および国家の成立である。分業は社会を急速に発展させた。『技術と政策の発達にともない国家のあらゆる成員は階級に分化されるのである』(p. 229. 邦訳 292 ページ)。まず『政治の部門と軍事部門とが分化する』(p. 230. 邦訳 293 ページ)。『指導者は権力を増大し、自らの地位にともなう利益を拡大しようとし、部下は利己的となり、それ以前から結成されていた諸党派は優越や利益にたいする各自の主張を要求する点で意見をもつようになる』(p. 191. 邦訳 244 ページ)。生産部門においても各種の区別が生じてくる。分業は個人間の不平等をいちぢるしくし、私有財産の不平等な分配は、経済関係にもとづく(Ferguson 愛好する表現によれば偶然的な)従属関係を生む。この従属関係は、政治関係からではなく、『おそらく財産の分配や勢力の不等を生ぜしめるなにか他の事情から生まれる』(p. 204. 邦訳 260 ページ)。貴族・僧侶およびこれらの従属関係から生まれる種々ことなる階級の人々の混和によって一般に政治組織が形成されるのである。このような社会においては相互的尊敬や愛情に代って、法律的な抑制によって平和が維持される。ここに、このような私有財産の関係を規制し、維持するために正規の法律が制定され、国家が成立するのである。この事情のもとでは、法律は『利益にたいする欲求こそが不法行為をおこなう主たる動機であるところから、主として私有財産のに関連することになるのである』(p. 238. 邦訳 303 ページ)。だから国家の任務は第 1 にこの私有財産の保護にむけられる。すなわち『政府の第 1 次的な目的は、その人民の財産を保護し、勤勉な人々がその労働の成果を収め、正当にかれに払わなければならないべき負債を回収することを保護し、取引の過程において起る争いにたして公平な裁判をすることである』(Principles, vol. 2, p. 426.)。かくてかれは、国家が社会より歴史的におくれてあらわれたこと、国家を社会のひとつの形態として把えることができた。すなわち国家の形成を社会の発展の 1 段階として捉え、国家の絶対性を否定することができたのである。すでに述べた多くの論者は、この点に、すなわち Ferguson が政治の形態を『国家の成員が本来階級的に如何に配置

されているかの様式』ならびに『それぞれの身分をして、その国において勢力を構成せしめるところの事情』によって規定しているところに、Ferguson の唯物論的見解の核心をもとめている。しかし国家の成立に至る簡単な歴史叙述からもまた人間性の原理からも明らかのように、Ferguson のこの理論はつぎのような制約・限界をもたざるをえなかった。第 1 に、かれは階級の基礎を経済関係、すなわち財産関係の基礎のうえで厳密には一貫して説明していないことである。このことは、かれが階級関係の要因として、『自然的才能および性質の相違、財産の不平等な分配、種々ことなれる技術の実践によって得られる習慣』(p. 279. 邦訳 358 ページ)を挙げていることから明らかであろう。第 2 に、最も重要なことだが、国家内部の階級対立が政治闘争をとめない、それが政治形態を決定するという結論には到達していないことである。人間性の原理ともとづいて国家内部の階級対立は、単に個人と社会との、もしくは利己主義と共同の幸福との対立に帰せしめられている。したがって闘争・対立の原理が、幸福の原理に止揚・解消せしめられている。『個人の幸福や自由が、社会の利益と衝突するばあい、かれはこの幸福や自由を見棄てなければならない』(p. 88. 邦訳 110 ページ)。そしてそのことは Ferguson の方法から当然導かれる帰結にすぎないことは今や明らかであろう。したがってこの点に、すなわち財産関係と統治形態との因果関係を明かにしたことに、Ferguson の歴史社会学研究の最大の貢献を認めることには賛成できない。むしろ Ferguson の歴史叙述の特徴は、このような社会諸階級の対立の分析よりは、それらの対立を超えて、人間社会の進歩を支えるものがほかならぬ人間労働一般にあることを発見したところにある。そして人間労働の特質についての重要な規定を明らかにしたところに、れかの古典的政治経済学への最大の貢献があるのではないであろうか。この観点は『市民社会論史』ではかならずしも体系的に展開されているわけではなく、むしろ implicit に、のちの著書『道徳・政治科学の諸原理』⁶⁾では explicit に、精力的に追求され、明らかにされたのである。すなわち『市

『民社会史論』で人間の活動を能動的に捉えた Ferguson は、知性をもつ人間が自己保存の機能をみたすのに、動物のそれとは異なることを明確に認識している。動物では自己保存の機能がその生活行為と一致した形で営まれるのに対して、人間は意識的な生活行為としてこれをおこなうことを明らかにしている。『人間の知識は、かれが専ら欲望の赴くところに身を任すにさきだつて、かれをして対象に明確な区別を試みさせるのである。人間はある感覚の対象物を他の観察の知覚によって吟味せねばならない。ふれようとするまえに眼をもって調べなければならない。飢や渴や食欲を満足させるまえに、あらゆる観察の手段を講じなければならない』(p. 40. 邦訳 50 ページ)。だから、人間が自己保存の機能をみたすばあいには、動物では盲目的性向としてあらわれるのにたいして、『その目的を本能的に知覚し、その目的達成に、かれ自身の観察と経験とから、最も有効と思われる手段を発見し、選択すること』(Principles, vol. 1, p. 122.) ができる形でおこなわれる。またこのような人間の特質、いわば労働は、動物とちがっても 1 つの特質、すなわち動物は直接的な肉体的欲望に支配されて生産するのにたいし、人間は肉体的欲望から自由に生産し、しかも肉体的欲望からの自由のなかで生産するという特徴をもつが、Ferguson をまたこのことを明確に認識している。『他の動物では、欲望が行動への唯一の動機であり、あらゆる瞬間に動物がそのとき存在する動機にもとづいて行動するのにくらべて、人間は本能の足枷からはるかに自由である。人間はある特定の欲求または本能が休止しているときに、自己の利益を確保し、損失をさける手段をとることができる』(Principles, vol. 1, p. 123.) そして労働は人間の意識的な生活行為としてあらわれる。人間に『このような観察と経験の結果手段の選択が任せられているのではない。…かれはそれらの手段を新らしく作りだすことができる。かれは、やりかたを変化させ、そのことによって前進することができるので

ある。そこから人間に実行を委ねられている多くの技術が生まれ、そのなかでしばしばさまざまな発明がほとんど、かぎりなく蓄積されるのである』(Principles, vol. 1, p. 123-3.) このような人間労働が社会のなかで実現することは、その社会性の原理から当然の帰結としてくりかえすまでもないであろう。このように人間の一般的特質としての進歩の可能性を実現するもの、『過去および未来を媒介的に結びつけるもの』(Principles, vol. 1, p. 195.) がほかならぬ文化的・物質的労働にあるという一般的把握に、——文化的活動にはここではふれることができないが——人間の社会性を通じて到達したことに Ferguson の最大の貢献がある。これによって、Ferguson はこの学派の先行者・同時代者である D Hume, W. Robertson の人間社会の歴史を生物学的類推によって把握する仕方、すなわち人間の社会生活は、幼年期、青年期、老年期に到るという把握にたいし批判することができたのである。Ferguson がこの見解を批判するつぎの章句からも、そのことは明らかであろう。『かかる推測は、まことに適切なものであって人類の歴史はこのことを十分に証明している。しかし国民のばあいと個人のばあいとは非常に異なるものがあるということは否定すべからざることである。個人的にみればそれは脆弱な構造と定められた生命の期間とをもっている。……ところが社会においてはその構成員は時代の進むとともに、人類は不断の若さと蓄積された利益とを享受すると思われるから、われわれは類推によって、単なる年代や年月の長さに関連して、衰耗をみいだそうとしてもむだなのである』(p. 316—7. 邦訳 408 ページ)。かくて『人類においては、個体が進歩すると同様に人類全体としても進歩する。人類は、前の時代に打ちたてられた基礎のうえに、つぎつぎと新しい時代を打ちたててゆくのである』(p. 7. 邦訳 10 ページ)。

人間性の利益への関心にその根拠をもつ商工業が、各個人の自由な活動に委ねられなければならないという見解は、Ferguson もまたこの学派の人々と同じくするものであった。国家は利己心に動かされる人間のなかに『富を獲得する忠実なる

6) *Principles of Moral and Political Science; Being Chiefly a Retrospect of Lecture Delivered in the College of Edinburgh, 1792.*

下僕と、獲得せる物を蓄積する忠実なる家令を得たことになるのである』(p. 218. 邦訳 278 ページ)。
『自分たちの特定の商売以外のあらゆる人間事象に無知であり、国家の利益を自己の注意の対象としてもたなくても、自己の活動に従っているかぎり、欲せざるにかかわらず、全体の維持に寄与しているのである』(p. 274. 邦訳 353 ページ)。従って『私的利益は国家の入念な工作に優る商業と富裕の保護者である』(p. 220. 邦訳 281 ページ)ことになる。国家の任務は、この分野においては、罪悪と詐欺を抑圧する消極的なものならざるをえない。しかしかれは、経済の分野での自由は認めても、これらの階級の政治自由ないしは政治への広汎な参加は、これらの階級が本来、国家の利益を考慮する全体の立場にたつことができない以上、否定されねばならなかった。『人間の政治的性格を尊重しないで、個人と財産の秩序や安全しか考えないような政治は、その享楽欲と利潤欲とを養うにすぎず、人間をして公共生活に役だたなくしてしまうからである』(p. 335 邦訳 434 ページ)。だから、ここに国家の利益を考慮する貴族階級の存在の意

義がある。ここにかれが政治的には Hume, Robertson と同じく保守的な立場にとどまらざるを得なをった理由があるのである。

IV 『スコットランド歴史学派』における Ferguson の地位 Ferguson が生産関係内部での階級対立を一方の階級と全体との関係に転化してしまった点を明確にとりあげ、財産の所有関係を基礎にして歴史の過程を説明したのは、同じ学派に属する John Millar であった。またかれや A. Smith においては、Ferguson の認めた市民の経済的自由が政治的自由をともなうことを明らかにして、選挙権の拡大によって商工階級の政治的参加の拡大を計るべきことが主張された。このように理論の発展と政治的立場の変化が同じスコットランド学派のなかでもみられるのであって、この発展をぬきにして、多くの論者のいうように、Ferguson をこの学派と歴史的研究の完成者として、またかれの理論を、この学派のなかで最も高い発展段階を示すものとしてみることは正しくないであろう。